

「人間の“人格”性の根源としての神

——ブルンナー『教義学』における人間論——

三 川 栄 二

序 本論の課題

論者は先に、「エーミル・ブルンナーにおける人格理解と人間論」(『明治学院大学キリスト教研究所紀要』第31号, 1999年)を提出し, キリスト教主義教育で謳われる『人格教育』の理解への一つの試みとして, そこで言われる『人格』の意味を問い, それをブルンナーの主張を手がかりに考察した。そこでブルンナーの主著である『出会いとしての真理』・『矛盾における人間』そして『教義学』第2巻におけるブルンナーの人間と人格理解を概観し, 次にそれを理解する上での背景となる「Imago Dei をめぐるブルンナーとバルトの『自然と恩恵』論争」と, その「自然進学論争」の経緯, そして『自然と恩恵』におけるブルンナーの主張と『ナイン! —エーミル・ブルンナーへの答』でのバルトの反論, さらに『教会教義学』第3巻におけるバルトの Imago Dei 理解と, これら一連の論争の前提にある『キリスト教綱要』におけるカルヴァンの Imago Dei 理解について概観していった。

そこで明らかにされたブルンナーの人格理解とは, 「人格」という言葉で一般に理解される, いわゆる孤立した自己の徳性や凡人とは隔絶した孤高の人間像を意味するものではなく, どこまでも「応答的・関係的」なものであるということであった。ブルンナーによれば, 人格とは他の人格的存在からの呼び掛けに応答する主体のことであり, それも神

という絶対他者からの呼び掛け、つまり唯一の「われ」たる神から「汝」と呼び掛けられることに応答していく責任を与えられた存在であるということ、さらにはこの神との「交わり」に生きようとする「決断」を担わされた存在であるということである。そこでは相互の関わり—交わりと関係—が問題となり、人間にはそれが実質的には喪失し機能しなくなったとはいえ、形式的（存在論的）に神に応答していく機能（応答責任性）が存在し、それが人間の本質であると共に、人間の人間たるゆえん（人間性）そのものであるという。そして『出会いとしての真理』においてブルンナーは、「究極の『真理』とはイエス・キリストの人格において啓示された神と人間との人格的な出会い」であるとして、これをブルンナーの「全神学の中心概念」とした。そして「聖書の真理概念は出会いとしての真理」であるとして、彼の『教義学』全体が、この「人格主義」で貫かれていく。そこでブルンナーの人格と人間論を理解する上では、単に彼の人間論に関する教説を見るだけではなく、「人格主義神学」とも言うべき彼の『教義学』全体から考察することが重要である。そこからブルンナーの「人格理解」が浮き彫りにされ、人間論も理解されていくはずである。「究極の『真理』とは神と人間との人格的な出会い」であるとするブルンナーにおいては、『教義学』の中心がその神と人間の人格的な出会いの場であり、出会いそのものであるイエス・キリストであり、それがキリスト論におかれるのは当然であるとしても、このキリスト論のみならず、教義学の根拠と課題を問う序論でも、神論でも、教義論、救済論、終末論に至るまで、この「神と人間との人格的な出会いと関係」が彼の『教義学』全体を通じて問われ、貫かれている。そこで本論では、この『教義学』の中での「人間論」の位置と機能を理解するために、特に「教義学の根拠と課題」（序論）との関係での「人間論」と、「神の自己伝達の永遠の基礎」（神論）との関係での「人間論」を考察するものである。

1 節 ブルンナー『教義学』における序論と人間論の関係

本節では、特に「教義学の根拠と課題」(序論)との関係での「人間論」を考察していく。ブルンナーはまず、新約聖書の啓示の証言の中心には、イエス・キリストという歴史的な出来事があるとして、そもそもこの『言は肉となった』ということが、神の自己告知の中心であるという。そしてこの「〈神の言葉〉は、我々人間が〈言葉〉ということでは理解しているものではないのであって、イエス・キリストご自身が、神の〈言葉〉なのである。それゆえ、神の自己伝達は、あらゆる人間の言葉、あらゆる〈彼一についての一語りかけ〉と比べるべくもないほどのけた違いのものである。イエス・キリストご自身は、彼についてのすべての〔人間の〕言葉以上である。神の〈言葉〉、神の決定的な自己伝達は、一人の人格、一人の人間、その人において我々が神と出会う人物なのである。彼がそこにおられ、彼が〈来られた〉こと、我々が彼自身を、その行為と苦難、その語りかけと存在において、神の聖と憐れみが我々の前に立って、我々を自分の所に来るように求め、我々にご自分を伝える人格において、我々の前に立つことを見て、知ることが許されるということ、一そのことが啓示、神の自己伝達なのである。彼において、彼を通して、神はご自身を我々に告知され信仰者の共同体自体は、第一義的には聖書によって生きてきたのではなくて、我々と共に生き、我々自身にキリストを生きた現実として証することができた生きた言葉によって生きているのである」⁽¹⁾として、この『言葉』がまさに生ける人格的存在であることを明らかにする。そして「もしもイエス・キリストにおける言葉の受肉によって、啓示とは、まさに我々のところにおける神の完全な現臨と我々が彼の許で完全に現存することを示されたとすれば、啓示とは、単なる知識の伝達ではなくて、生命を与え、生命を生み出す交わりなのである」⁽²⁾として、啓示の「人格的交わり」としての性格を明ら

かにする。旧約聖書啓示の標準的な形態は、〈神は語る〉ということであり、「啓示は単純に〈言葉〉とか〈語りかけ〉というような概念のもとにおくことができないような、歴史における神の働き、神の行為の中にある」⁽³⁾のである。そしてここで我々と旧約聖書の間に、旧約聖書においてはじめて約束され、その本来の内容が、使徒たちと教会によって宣教された神の啓示の実現、すなわちイエス・キリストご自身という「新しい啓示の形態」が出現したという。このイエス・キリストとは、「言葉ではなくて人格であり、完全に歴史的に明白な人間的な生活……しかも全く違っている人間としての運命をたどったお方である」⁽⁴⁾。だからここで注意しなければならないことは、「彼は言葉ではなく、語りかけでもなく、預言者の語ることのように命題の総括でもない。……つまり神の啓示の自己現在化、完成において神が行動されている人格である。……インマヌエル、神われらと共にいます、ただ神に関する言葉だけではなくて、神ご自身が今やそこにおられるのである。語りかける方ご自身がそこにおられるのであるから、ただ語る方だけではなく、行動される方である、というその事があらゆる過去に対して、古い契約における啓示に対しても、新しい時代の到来を示している」⁽⁵⁾、そういう人格的存在ということである。このように「これまででは、神の啓示は言葉、語りかけの形態をとっていたが、今や啓示の形態は、具体的な人格の姿において語り、行動する彼自身なのである。……一人の人格は、語りかけの言葉ではないのであって、語りかける者であり、しかも……行動する者、生き活きと活動する主体」⁽⁶⁾となったのであった。つまり「イエス自身が固有な啓示なのであってその語りかけが啓示ではない」⁽⁷⁾ということである。

さてこの啓示に対する人間の側の〈反応〉、ないしは「関係は今や、それが向けられているのが一人の人格であると同様に人格的なものとな

る。大切なのはもはや言葉の関係だけではなくて、人格関係であり、〈第三人称的な客体信仰〉だけではなくて、その方を信頼し、そこに来たり、自分をその方に献げることなのである。啓示と信仰とは、今や人格的な出会い、人格的な交わりといった性質を持つ⁽⁸⁾ということである。だからキリストに対する信仰の告白は、依然として「個人的な出会いの次元」において起こりうる。「あなたはメシア生ける神の子」という、この「あらゆる真実な告白の原型は“あなた”に向って語りかけられる神の言葉に対して“あなた”とって答える形での信仰告白⁽⁹⁾」だからである。だからこの「信仰の行為は祈りの形でなされる信仰告白であって、それは“あなたとわたし”といった次元での事柄であり、“彼とあなたがた”といった次元における教えの言葉ではない⁽¹⁰⁾」とブルンナーは語るのである。つまり、教えにおいて人間はもはや本来の信仰告白においてそうであるように、神に対してあなたという形では語らずに、いまや神について、彼という形で語ることになる。そこでブルンナーによれば、「教えはもう神の言葉に対する自発的・人格的な祈りの応答ではなくて、すでに、そのもっとも単純な形においても、神に関して考察的に語る言葉なのである。このように人格的な出会いの領域から考察といった非人格的な領域に脱出することは、あらゆる教えの前提なのである。そこでは神はもはや語りかける神ではなくて、論評される神⁽¹¹⁾」ということになる。ブルンナーが繰り返し拒絶するのは、この神に対する第三者的・傍観者的・客観的態度である。それはおよそ神への人格的な応答としての信仰に価しないからである。

それに対して、使徒たちの告白的な証言はいつも同時に従順を求める呼びかけであり、「すべての使徒的な教えは、信仰であり、従順を求め、勧める語りかけであり、他者を信仰の立場に引き入れようとする語りかけ……それは応答を強く求める証言⁽¹²⁾」であった。それとは逆に「第三

人称、〈神に一関する一教え〉への変化は……それが広がれば広がるほど語られている事柄と、我々が祈りの応答において語りかける御方との相違が生じてくる。教義学が遠くに広がれば広がるほど、源泉となっている直接的なもの、信仰において把握された御方への信仰告白は遠ざかるのであり、主題との関係が、人格関係にとって変わるのである⁽¹³⁾と指摘する。たしかに教会の教えはいつも信仰の告白、表現であるが、それと同時に信仰の対象ではない。「信仰の対象は啓示、イエス・キリストご自身であって、教会の信仰告白ではない。……すなわち信仰とは、啓示の真理への信仰なのであって、決してそれと比べられるような人間の教えへの信仰ではない⁽¹⁴⁾」のである。つまり「信仰の真理は〈出会いとしての真理〉、〈汝と我〉といった人格の次元での真理なのであって〈もの事〉の次元での真理ではない。信仰が把握している真理は人格的な自己開示、啓示の真理なのであって、研究した結果明らかになる真理とか思考によって得られる真理ではない⁽¹⁵⁾」のである。だから「信仰が意味する神認識は、イエス・キリストにおいて自己を啓示される神の人格との人間の人格の出会い、聖書では心と言われている人格の中枢部の出会いなのである⁽¹⁶⁾」とする。それに対して「神学、教義学はこのような信仰それ自身ではないのであって、神学とはその批判的な思考において考察する信仰なのである。……教理にまでなった信仰告白には、人格の次元から教理的な主題の次元への移行は結果として避けることはできないのであり、教理というものはまさにこのような次元の交代の中で成立する⁽¹⁷⁾」と主張する。ブルンナーによれば、神学や教義学とは、イエス・キリストとの「人格的出会いとしての信仰」とは根本的に相違するものであり、そこには次元的差異があるのである。つまりそれは「〈出会い—における—思考〉から、〈何なにについての—思考〉にしてしまうような、あの次元的な転換、考察⁽¹⁸⁾」にほかならないのである。こうしてブルンナーは、その『教義学』の導入である「序論」において、そ

もそもこの「神学・教義学」なる営みが、主イエス・キリストとの人格的な出会いである「信仰」とは、相違するものであり、そこでは常にこの「人格性」を重視しなければならないことを明らかにするのである。

2 節 ブルンナー『教義学』における神論と人間論の関係

a. 神論を取り上げる根拠

次に、神論を取り上げて、ブルンナーの『教義学』において彼の「人格理解と人間論」がどのように関係しているかを考察することで、その「人格理解と人間論」を明らかにしていきたい。ここで神論を取り上げる根拠の第一の理由は、ブルンナーが「神と人間との関係」を密接不可分の関係として理解するからである。人間がどこまでも「神からの人間」として理解されている以上、人間を理解する上ではその源となる「神」を理解する必要があるからである。ブルンナーによれば、この神とは「人間への神」だからである。第二の理由は、人間の「人格」ペルソナという言葉が、もともとは三位一体の神の位格に由来するものであり、人間の「人格」の何たるかを理解する上でも、神の人格（位格）ペルソナがどのようなものであるか、それをブルンナーはどのように理解しているかを把握する必要があるからである。

b. ブルンナーにおける神論と人間論の関係

ブルンナーは神と人間との関係を密接不可分の関係として理解した。彼によれば、旧新約聖書の啓示は、「神の人間に対する関係と、人間の神に対する関係」とを問題としており、そこでは「神自体という教理、人間自体という教理は含まれていない」⁽¹⁾という。聖書の啓示は、神を常に〈人間への神〉として、人間を常に〈神からの人間〉として見ていたのであり、聖書の思惟は常に「動詞的、歴史的、人格的」であって、ここでは「関係」が問題とされ、神は、世界と人間との関係に『入りた

もう』方であり、また常に人間との関連において行為したもう方であるという。また人間も、その行為は信仰であれ罪であれ「神との関係における行為」であって、いずれも相互の関係においてそれぞれが関係づけられ、規定される存在とされるのである。「聖書の神は常に人間への神である。……神はそもそもからして、人間に対する支配と人間との交わりとを問題としたもう御方である。……同様に聖書における人間は常に神からの人間である。……このような神の人間に対する関係の出来事、このような人間の神に対する関係の出来事、これが聖書の内容である」(2)とする。しかもこの関係は常に「神から発して人間に向かい、その後初めて人間より出でて神に向う関係である。神が人間に対する関係が、常に第一である。人間が神に対する関係は、常に第二であって、それはこの第一の関係を基礎とし、またこの第一の関連している」(3)、そのような関係であるとする。そして人間が神を認識するのは、まず人間が神によって認識されているからであり、そのために神がご自身を自己啓示されたかぎりにおいてであるから、「神と人間との関係の出来事は、常に啓示の出来事」であり、またこの「人間と神との間の出来事の関係は、常に認識の関係」となる。このように人間というものは、神に対するこのような関係において自らを認識すべきなのだとするのである。そこで我々は本論において、神から人間を理解する、つまり神論において人間がどのように理解されているかを考察することとする。

3 節 ブルンナー『教義学』の神論

a. 「自己伝達における神」

ブルンナーの『教義学』は「神の自己伝達 (Selbstmitteilung)」という視点から全体が構成されている。「これは彼の神学に独自なもので……全く人格神の自己啓示に直面しながら行われた教義学である。ブルンナーがこのように神の自己伝達から教義学を立てるのは、出会いにお

ける人格的呼応関係の中から必然的に出たものであった⁽¹⁾。そこにおいては、神と人間との関係が、「出会い」として把握されることで、「関係性」が語られると共に、「区別性」が明らかにされる。神と人間とが「出会い」において関係づけられるためには、神の「他者性、超越性」が前提される。それによって教義学は人間の実存や「信仰論」といった主観主義に解消されることなく、しかも人間の応答性が確保されることで、人間の主体性を捨象した客観主義からも区別されるものとなるのである。このようにブルンナーは、「出会いとしての神学」を「神の自己伝達」という視点で一貫させ、第一部の神論は「神の自己伝達の永遠の根拠」として、第二部の創造論、人間論、キリスト論は「神の自己伝達の歴史的实现」として、第三部の教会論、救済論は「聖霊による自己現在化としての神の自己伝達」として、第四部の終末論は「永遠における神の自己伝達の完成」として展開させていくのである。「神の自己伝達」、すなわち神の自己啓示によって人間の神認識と出会いは成立するということの根本主張は、すでに1930年の「哲学者の神観と信仰の創造神」(論文集『神と人』所収)に見られるもので、そこでの中心命題は、次の言葉に表現されている。「自分の言の中において自分を啓示する神、すなわち聖書の神のみが人格論であり、これに反して、あらゆる哲学的神観は、たとえ如何に有神論的な振舞をしても、必然的に非人格的である。人格的なものは決して考えられたものではない。考えられたものは、本来、非人格的である。これに反して、神である汝と、人間である私とが出会うことのみが人格的である。かかる神と自我とが出会うことは、啓示の呼びかけの信仰の答として起る」⁽²⁾と。

人間の神認識が神の自己啓示に基づき、それのみ規定されるということは、19世紀プロテスタント・リベラリズムを否定して、人間の真理認識が徹頭徹尾神の自己啓示に基づくことを主張した「弁証法神学」と

軌を一にする。そこではシュライエルマッハー以来の主観主義、キリスト教真理は信仰者の絶対者に対する敬虔な絶対依存の感情に由来するとして、それを人間の宗教感情に矮小化し、主観性へと解消してしまう（だからキリスト教教義学は『信仰論』となる）立場を否定し、それによって壮大に構築されていく社会構造（19世紀ヨーロッパのキリスト教と教会とそれによって成り立つ市民社会そのもの）を『宗教』として断罪し、客観的な「外から」の真理認識、すなわち「啓示」による人間の神認識を主張した立場と一致する。ただその神学運動の代表とも言うべきバルトとブルンナーの違う点は、ブルンナーが「啓示による人間の神認識」を単なる客観主義に終らせるのではなく、そこに人間の応答性、決断性を主張し、『出会い』という概念で貫いたことにある。ブルンナーから見れば人間の神認識を徹頭徹尾 *extra nos* で貫き、どこまでも「イエス・キリストにおける啓示のみ」とするバルトの立場は、人間をいわば「木石」の如く見なすことになるとの憂慮の念を抱かざるをえなかった。ブルンナーが、人間の神認識の根拠を一方では客観的な神の自己啓示に置きつつも、さらにその啓示に応答する人間の主体性を見ようとした点は、重要だということができる。そこにおいてこそ、真の「出会い」が成立するからである。それゆえブルンナーにおいては、この「神と人間との出会い」が神学の中心概念となって、教義学全体が展開されていく。そして神論では、「人間に会う神」——それをブルンナーは『自己伝達の神』とするが——を神の本質として、「神の名」「主なる神」「聖なる神」「神は愛である」「三位一体の神」として考察、展開していくことになる。

b. 神の自己伝達（啓示）としての「神の名」

ブルンナーはまず、神論を「神の名」による啓示から論じ始める。聖書の啓示がまず第一に我々に教えるのは、神の〈秘義〉は、啓示によっ

てのみ真の秘義として理解されるということで、そこでは「神の名前の啓示」は、聖書の啓示の証言の中心となっているとする。「神は我々に向かっていき、我々は神に向かって存在する。神は〔第三人称の〕Es ではなくて、我々に語りかける〔第二人称の〕Du 汝なのである。神はご自身をその自己啓示によって伝達する。我々が神に呼びかけ、神と交わりを持つために、神は我々に自らを知らせる。……その基礎は、神がそうあろうとなさる意志、交わりをおもちになろうとする意志であり、その目的は神の栄誉と、神との交わり」⁽³⁾だという。そこでこの点を五つに分けて説明する。

第一は、神はその名前を自ら告知される場所でだけ告白されるということである。つまり神とは啓示の神、ご自分を伝達する啓示者であることをその本質となさる神であって、〈自己伝達における神〉それこそが〈神の名前〉なのである。

第二は、〈神の名前〉とは、神が人格である、ということである。神が名を持つゆえに、神は第三人称のそれ (Es) ではなくて、我々に語りかける第二人称の汝 (Du) なのであり、「それは、それが自ら我々に語りかけ、その汝としての存在の秘密を語りかけることにおいて示す、その瞬間において、はじめて人格となる」⁽⁴⁾ことを示す。ここで「我」と「汝」について正しく考えなければならない。人間においては「汝」は、絶対的なものではなくて相対的なものである。「なぜならそれはただ、〈わたし—以外の一わたし〉であるだけではなくて、また〈わたし—と同じ—わたし〉でもあるからである。それは、わたしと共に〈人間〉という類概念においてまとめられる。……しかし神に対してはいかなる類概念もない。……神は絶対的にそれ以外の一切と相対する汝である。……わたしと同じレベルにあることなどはできない汝なのである。

だからこそ、わたしはこのような絶対的な汝を、それ自体考えることは絶対にできないのであって、神が御自身で御自分を告知するかぎり、神を知ることができるだけなのである」⁽⁵⁾。そこで神は、我々と「汝」として出会う。このように「わたしに語りかけ、その語りかけにおいて、わたしとはまったく独立したお方であることを啓示する神」こそが、本当の人格的な神であり、それはただ〈活ける神〉だけである。この神は「その名前を名乗ることによって、御自身をわたしに知らせる行為において、わたしの思想を越えて、わたしの思想と経験の領域に入ってこられる—この神だけが本当に人格的な神なのである」⁽⁶⁾。そこで名前をもつことは、人格的な存在の特権であり、また人格的な存在を示す。つまり「そちらの方から自分の名前を名乗ることによって、我々に自分を〈紹介する〉ような存在」であり、このように本当の人格的な神は、思考によってではなくて、その名前が告知されることによってのみ知られる、啓示の神なのである。

第三は、名前を知らせることは、御自身を他者に向って開くことであり、それゆえ人格関係、交わりの設定——すくなくとも、その始めだということである。「神は御自分を啓示する者に、御自分を与え」、「また「与えられた方の者は、その者で、神への権利を持つ」ことになる。彼らは、いまや神に呼びかけることができ、またそれが許される。このように名前を告知することは、交わりを設定することである。そして「名前の告知は、啓示者の自己犠牲において完成される」のである。なぜなら、イエスはその人格によって神の名前、その人格の秘密を完全に、究極的に知らせることによって、聖なる神と、罪ある人間との間の交わりを打ち立てられたからであり、「神の自己告知は、神がそれを通して、その閉ざされた自己栄光と、自己充足から歩み出て、自己のための存在から、我々のための存在へとなられる行為」⁽⁷⁾だからである。神の自己

告知は、神が我々のために存在することを示す行為なのである。そうして神が我々のために呼びかけ得る神となることによって、はじめて神は我々にとって本当の汝となるのであり、本当に人格的な神となられるのである。

第四は、神の名前の啓示は「このような自己確信的な、我といった孤独の終り、自分の中に閉じ込められた自己真理の終わりであり、このような自分で到達ができる真理の終わり」⁽⁸⁾であるという。啓示とはこのような自己の円環が破られることであり、真理が固有な動きを持って汝のところまで到達したことなのである。

第五は、〈神の名前〉こそは、啓示によって開かれた、本当の人格的な神の本質、このような啓示においてのみ、そのように自分を伝達する神の本質として認識され得るような、神の本質の秘義であるということである。

こうして「神の本質は自己伝達の意志である」ことが明らかにされる。それは「我々のために、自己だけの神であらうとしない、自己を伝達する神」であり、「その本質が自己伝達である」ような神であって、この神について、我々はただその自己伝達をとおしてだけ語り得ることができるのだとする。「神は実際に我々に向かうお方として存在し、啓示の現在において御自分をあらわになさるところでだけ、我々に向かって存在なさるお方なのである。それゆえ、神の名前は、神がその人格的な現在においてそこにおられる所で、つまりイエス・キリストにおいてははじめて完全に啓示される」⁽⁹⁾。神が我々のために御自分を犠牲になさる、まさにそこではじめてインマヌエルの神が〈我々のために存在する〉神であるということが告知される。こうして「恵みの真理はイエス・キリ

ストを通して現われた」のであった。

c. 「主なる神」としての神の自己啓示

さらに神は、御自分を〈主〉として啓示された。そこでまさに、この主が、選ぶ方であり自ら神関係を設定し、その歴史的な行動と自己啓示によって御自分がそこに〈存在している—自然物を一越えた—主〉であることを示される方なのである。「わたし、わたしは主である」という、この絶対的に独自のわたし、第二のものがそれと並んで存在することがあってはならないわたし、これだけが呼びかけるわたし、これだけが“汝”と呼びかける“我”，それが主といわれているのである。「神が語りかけられる」ということの中には、神が自分自らを告知される主体であるということが含まれているとブルナーは考える。だから我々が信仰において問題にする神は、「思考の客体」ではなくて、「われとして汝に語りかける主体」なのである。神は、語り、行動し、自らその意志に従って告知する人格である。そこでここで人間の人格との関連で、神の人格性が論じられるが、それはどちらも人格的存在である神と人間との類似性と相違性のなかでの人格性である。すなわち「神だけがまことの人格であり、人間は、ただ神の像、イマゴ・デイとして同じように造られた人格であるに過ぎない。神はただ主体であって、同時に客体でもあるのではない。神は絶対的な主体、絶対に、無制限な意味で主体なのである。しかし人間は、同時に客体でもあるような主体なのである。人間の我は、……制御された意味での主体にすぎない。人間は我であって、それなのであり、同時に人格であって非人格なのである。それゆえ人間は……模写的な表現という意味で人格なのである。人間は同時に非人格、物体でもあるような人格なのである。神は……純粋の人格なのである。客体との違いとなる主体の本質は自由であり、……無制約的に自発的、行動的であって、同時に受け身ではなく、ただ与え、同時に受けること

はない。そのようなことは……ただ自らを啓示なさる神の本質としてのみ知ることができるのであり、我々はそのような神から、我々を語りかけられている者として、また同時に責任的な人格として自覚するのである。責任性が、我々に知られている人間的な人格存在の本質である限り、その中にはすでにこの責任性を基礎づけるものとして、応答責任的な本質を造っている神の人格存在が第一のものとしてあるのである。人間の人格存在は、神から現存在へと呼ばれている存在のことなのである。……主なる神は、我々の責任的な人格存在の前提である。神の呼びかけから我々は責任性を持つのであり、我々の主としての神の自己啓示から、我々は自分たちの人格的な価値を認識し、自分自らを啓示なさる、無制約的な人格価値、主としてのその威厳の模造として等しく造られた我々の人格存在を知るのである」⁽¹⁰⁾そこで真に〈自存的である〉と言われうるのは、徹底的に主体だけが、そうして決して客体ではないものが、絶対的な自由を、絶対的な活動性を、絶対的な自立性、純粋な決定性、創造本来の力を持つものだけである。つまり創造者だけが自由な主なる神であり、ただその自由で、自己栄誉的な啓示において知られる神が、そのような神として知られるのである。

d. 「聖なる神」としての神の自己啓示

神はご自身を「聖なる神」としても自己啓示された。その神の聖性とは、神をそれ以外的一切から区別し、〈絶対者〉である神の本質超越を表わす、神の本質である。それゆえ聖であるというのは、神だけに固有なことであり、神の存在をあらゆる他の存在から区別するものなのである。「聖」ということで意味されることは「限界設定、排斥、拡張、包含」であるが、それは「神は一ただ一神であり、被造物は一ただ一被造物にすぎない」ということ、したがって「人間は被造物であって、創造者ではない。依存的な人格であって、自立的な人格ではない」というこ

とである。啓示の神は認識し、承認されることを望まれる。「すべての啓示は自己伝達であり、自己伝達は包み込むこと、自分に引き寄せること、近くに近づくこと、交わりを求める近さであるが、抵抗する者と出会う場合には、焼き尽くす火ともなりうる」⁽¹¹⁾。こうして神は「聖なる者として、すべての被造物とは区別されることを望まれる。しかし、聖なる者として、神はまた、その栄光が全被造物に満ちあふれ、それゆえ、神にだけ由来するものに参加することを望まれる。それゆえ、神の聖性において、その愛において完成される神の自己伝達が基礎づけられるのである」⁽¹²⁾。それゆえここで神の「聖」と「愛」は一つのものとして結びつけられていく。

e. 「神は愛である」という神の自己啓示

この神の聖の認識は、神の愛の認識において完成する。「神は聖と愛との逆説的な二重性の中で、その名前を啓示なさるのであり、知られ、呼びかけられることを望まれるのである。神は御自分をただ、排他的に聖書において、イエス・キリストにおいて啓示される。その啓示において、イエス・キリストにおける御言葉の受肉において、我々にその名前を告知される神は、その啓示全体が、人間への恵みのへりくだりのただ一つの運動であり、救済の憐れみの行為なのである」⁽¹³⁾。そこで重要なのは、『神は愛である』という御言葉の啓示によって「愛が神の属性ではないことが語られている」ということである。「愛」は「神の本質」なのである。この概念、この愛の理解は、ただ啓示の出来事そのものからだけ得られる。愛とは、神が御自分を与えること、愛とは聖なる主であるお方の、自由に贈られた恵みのことなのである。「価値充足的、価値適応的、価値補充的」なエロースと対比して、「新約聖書のアガペー、神の愛は違う。価値欲求的ではなくて、価値創造的あるいは、価値贈与的である。それは価値あるものにおいて基礎づけられるのではなく、価

値喪失、反価値的なものに向けられる」⁽¹⁴⁾のである。ここでは愛する者は自分のためには何も獲得しようとはせず、ただ愛される者だけが何かを得るのである。愛はここでは自己伝達、自己犠牲、自分のものを、愛が差し向けられる他者に与えることである。

それゆえ「愛とはまさに神が、自己—自身から出ること、自己—自身の一下へと下ること、その自己—犠牲、自己—伝達なのであって—まさにこれが神の啓示なのである」⁽¹⁵⁾。つまりイエス・キリストこそが神の自己啓示であり、彼は「人格における神の愛」なのである。この愛は神の伝達の意志、その啓示の意志以外の何ものでもない。そして神の本質とは、このような伝達性であり、自分から自らを示すこと、自己伝達—それが神の本質なのである。そして神の聖であるということが、ここで自由に贈られる愛の前提となる。「聖なる神の愛だけが、本当に自由に贈られる愛なのである。自らが完全であるような神、何かほかのものを必要としない、自己充足的な神、すなわち、絶対的な主であり、自らが主である人格だけが、自由の中で、理由なく愛することができる神」⁽¹⁶⁾だからである。ブルンナーによれば、「神の聖なる意志は、聖なるお方との完全な交わりとして、被造物において完成する。これが神の愛なのである。神の最も完全な支配は、神の愛があらゆる反抗を打ち破り、その被造物の心から神御自身の愛が、再び神へと逆流するそのところではじめて実現する。神が御子において、御自身を完全に献げることによってのみ、神のものである被造物は完全に神の所有となる。このようにして聖は愛へと向い、愛において自己を完成する。逆に神の自己伝達は、被造物が徹底的に聖なる神の意志に一致し、神の聖なる本質を映し返し鏡となり、そのような本質が愛しつつ支配するところで、はじめて完成する。救われた者と救う者、救われた者同士の完全な交わりが一つとなるイエス・キリストにおいて、聖なる神の支配と、憐れみ深い自己伝達

とは一つとなる。そこでは、被造物における栄光、聖性の輝きと、完全な交わりと救いが一つなのである。愛は聖を完成し、聖の完成においてだけ愛は完全に完成するのである。神は啓示される神として、すなわち、自己を啓示する神として、愛する神。神は主—絶対的な主体存在—であるということが……自分から出て、自分を伝達する存在であるという意味で、何かへと向かう主体存在なのである。……神の本質は、自分—から—輝きで、自分—から—伝達する行為、交わりを求める人格存在なのである。神の〈形而上学的な〉存在は、ただ自己のための存在（主体）であるだけではなくて、我々のための存在である。……神は自分を自分以外の対象に与え、自分のものをそれに伝達しようとされたのである。とりわけ〈神のかたちに従って〉人間を創造したことにおいて明らかになる。神の固有なもの、その固有な聖は、人間の顔において照り返されるべきなのである」⁽¹⁷⁾ということになる。このように、神のかたちに似せて造られた人間は、神の愛から、愛に向かって造られたものであり、これが創造における人間の定めなのである。そして「約束のメシアが事実として到来したということは、……啓示の完成であり、交わりの創設の完成、神の交わりの開始であり、神の交わりの実現なのである。十字架につけられたイエス・キリストは、罪ある被造物に対する神の完全な自己伝達である。イエスの十字架において、主なる神は当然な仕方において到来し、神の愛が完全に表現したのである」⁽¹⁸⁾。

f. 「三位一体の神」としての神の自己啓示

最後にブルンナーは、御自身を伝達する神、聖にして愛なる神が、「父と子と聖霊」の名のこの三重性において御自身を我々に伝えられ、これらの三つの名は、自己伝達における神 *Gott-in-Selbstmitteilung* を特徴づけるものであるとして、「三位一体」を論じる。しかもこの神の自己伝達は歴史的、客観的なものでは完結しない。「それは我々を探し

求め、我々の自己、我々の心を求める。聖なる神の自己伝達は我々の聖化を欲したもう。愛そのものである神の自己伝達は我々をその愛の中に取り込み、彼の愛を我々の心の中に注ぎ込む。聖化と愛における交わり、それが聖霊の業であり、その本質が聖にして愛である神の自己伝達である」⁽¹⁹⁾として、御父、御子による自己啓示だけではなく、聖霊の啓示についても語ろうとする。

イエス・キリストの到来は、この「神の人格的な自己現在化」に他ならない。そこにおいて「神は愛でありたもう方として自己自身を、すなわち御自身そのものであるこの愛を贈り与えることを欲したもう。……神はそれを人格の現臨において、約束された〈神われらと共に〉として、行いたもう。神の憐れみ深い愛は、御自身を現実に罪人にまで低くし、御自身を現実に我々のために死に引き渡す人格における、愛したもう現臨として、初めてリアルに我々を捉える。イエスの十字架は『降って行くこと』、愛する神の卑下する自己現在化の最終地点である。神御自身の愛であるこの愛が我々を捉えることによって……我々は聖霊によって内側から神の愛に捉えられ満たされる。愛でありたもう神にご自身が人格の現臨の中にいたもう」⁽²⁰⁾。そしてこの神の自己現在化だけが、御子の人格の秘義を開示するのと同じほど確かに、ただ神の自己現在化だけが神との交わりを作り出すことができるのである。ただ赦したもう愛である神ご自身が人格的な自己現在化において我々の内に到来したもうことによってだけ、我々は自己現在化だけが、つまり言葉の受肉が、神的な姿であられた方が僕の姿をとって来られるということだけが、聖なる主の支配と、愛なる主との交わりを実際にもたらすことができる。ただ神の真の自己現在化だけが真実に我々に神を啓示し、真実に我々を彼と和解させることができるのである。ただ自ら語り、自ら行為する、神の人格的現臨だけが完全な啓示であり、和解である。そしてまさにこのこ

とが、イエス・キリストにおいて起こったのである。このイエス・キリストにおける出来事を私たちへともたらし、神と私たちとの間に「交わり」を生起させるのが、聖霊に他ならない。

この「啓示する者と啓示される者とが一人の方」であるということからもたらされる、父なる神が本当にイエス・キリストにおいて御自身を啓示する方であるということ、そこではそのキリストの我とは本当に聖にして憐れみ深い神の我であり、神はそれ故ご自身においてすでに、イエス・キリストにおいて自己を我々のための神として啓示したもう当の方である。神はそれ故単に我々との関係において愛する方であるのみならず、御自身の中で愛そのものであるということになる。だからまさに神こそが『愛』なのである。『神が愛である』とは、このような神ご自身の事態、出来事そのものを表す。そしてこの啓示する者と啓示される者との同一性によって、ようやく厳密に人格的な神思想が考えられるようになる。もし神が自己自身においてではなく、世界との関係において初めて愛する者であるとすれば、神はただ世界との関係においてだけ人格的な神であり、自己自身では非人格的ということになる。「イエス・キリストの人格存在は単に神のプロソーポン（顔）、人間の姿をとった神顕現というにとどまらない。イエス・キリストの人格存在は神の人格存在そのものである。我々に語りかける神の我は神の永遠の我である。神が我として存在することは一つの歴史の表れではなく、その永遠の本質性格である。神は永遠の昔から、世界が存在する前から、語りかける方であり、愛する方である。言葉は世界に対し伝達する形式として初めて生じるものではなく、永遠の昔から神の本質に属しているものである」⁽²¹⁾。このこと、つまり神の内的三位一体こそ、神ご自身の中での愛し合いと交わりの関係こそが、神が人格であるということであり、また人間がこの神の人格性に似せて、神に依存しつつではあるが人格である

ということなのである。

4 節 『教義学』神論における人格とキリスト教主義教育

これまでブルナー『教義学』における神論、神理解を概観してきたが、この「神」を前提として理解される「人間」とはどのようなものであろうか。そこでは「人格」は、どのように理解されているのであろうか。ブルナーによれば、人間とは呼び出された者として、人間であるところのものである。我々の人格存在の根拠は神の呼び出しであり、愛による愛への呼びかけである。この呼びかけにおいて我々は応答責任性を持ち、この応答責任性において初めて我々は自由を持つ。神が我々を認め、我々の人格全体を知りたもうということはそれ故、常に両面であり、聖なる応答責任の表現であり、かつ神の愛の表現なのである。従って我々の真の自由と我々の真の人間存在とは、自由な仕方でもって我々に贈り与えられる神の愛からの呼びかけを、我々が経験する場所において実現する。その場所とはすなわちイエス・キリストであるとす

これまでの神論から明らかにされた「神の人格性」とは、神がご自身の「名」をもち、私たちに対して「語りかけ」、私たちを「汝」と「呼び掛けられる」方であるということ、そうして私たちに相対する「他者」として、私たちを人格へと呼び出し、人格として立たしめてくださる方であるということであった。この神は、私たちにご自身の名を呼ばしめさせることによって、私たちとの交わりを持つことを欲し、また交わりをもってくださいる方であり、そのためにご自身を私たちにお与えくださった方であった。このことは抽象的な真理ではなく、歴史的な人格において具現されたのであって、イエス・キリストという人格において、神は「私たちのために存在する神」であられることを自己啓示さ

れた。人格であるとは、「主体」であるということであり、自らの決断と意志において他の人格に呼び掛け、語りかけて、交わりをもつことができる存在であるということである。それゆえ「孤立した人格」というのは、この本来の在り方からすれば矛盾した存在ということになる。人格的存在であるとは、どこまでも社会的存在であるということであり、他の人格的存在との関係の中にあるということだからである。そこでしかしこの愛と交わりにおける存在としての人格は、神のみである。神だけが真の人格たりうる唯一の存在である。なぜなら神だけが、真の意味で主体であり、「三位一体の神」すなわちご自身の中で生きた愛と交わりの中におられる自由な主体であられるからである。人間の人格性は、神のこの人格性の模像であり、どこまでも神に依存したものにすぎない。人間は、人間にとっての真の「汝」であられる神からの呼び掛けと語りかけに応答して、自らの主体的責任においてそれに応えていくことに、応えていくことにおいて人格として呼び出され、人格とされていくのである。

このことが明らかになるのは、キリストによる「選び」においてである。そこで「私の主である神が永遠の昔から私を、永遠なる愛のまなざしをもって見つめておられ、それ故にこそ私の個人的・人格的な存在と生に永遠の意味が与えられるのだということ」⁽¹⁾を知る。そして「私の信仰のまなざしが神の永遠のまなざしに出会うことによって、そして私が神の永遠の愛によって〈見つめられる〉ことを知ることによって、私は自分自身に永遠の評価を得るのである。永遠の昔から私へと向かって発せられている呼びかけは仲保者であるイエス・キリストを通して、私を私の永遠の定めへと呼び出す。神の永遠性が神との永遠の交わりへと呼びだされるということ、それがイエス・キリストの福音」⁽²⁾なのである。だから「選び」とは、「愛において呼びかけ、ご自身へと招きたもう神

との出会いである。選ばれた者とは呼び出された者のことであり、神の子供であることへの召し、神との交わりへの召しを聴き取っている者のことである。信仰者個人は、この呼びかけを……〈個人の人格に〉向けられた呼びかけとしてだけ聴きとることができる。……なぜならこの呼びかけはただ一人ひとりにできること、すなわち個人的な決断、信仰の服従を求めているからである」⁽³⁾として、この神の選びの呼びかけに応答し、決断し、服従していく在り方において、人間の「人格性」を捕らえようとする。人間が、「人格であり続け、神と人間で起こることは人格的な出来事、すなわち応答責任性の次元での出来事であり続け」⁽⁴⁾るということ、それが人間が人格であるということである。だから人間は恵みの受領者としてもまた応答責任的な主体であり続け、決して〈切り株や石〉にはならないのである。すなわち「神は私を決断の自由において神の愛の呼びかけに然りを語る者として欲したもうという仕方、この私を永遠の昔から愛したもうのである。人間の答えは、神の意志の中に、自由なる人格的な決断として含まれている」⁽⁵⁾ということこそブルナーの語る「人格性」なのである。

こうしてこれまで概観してきたように、ブルナーの人間論の中心にあるのは、「人格性」である。ブルナーの「出会い」の思想は、神を人格的に把握すると共に、人間をも人格的に理解する。人間は神なる〈われ〉に〈汝〉として呼び掛けられ、その神に主体的に応答することで、自己を人格として確立する。だから『キリスト教のつまずき』において、「人格が何であるかは厳密な絶対的な意味においては、ただ人格的な神との出会いにおいてのみ理解される」⁽⁶⁾と語る。そして人格が、ただ神との出会いにおいて確立されるとするならば、人間が人格的存在であるということは、神と人間との人格的呼応関係、つまりキリストにある救済へと方向づけられることになる。端的に言えば、「キリストの救

いなしには人間は人格となりえない」ということである。それゆえキリスト教主義教育の究極的な目標は、人間が本来神によって創造された人間となっていくために、人間の人格性の根拠であり源である「神」へと向けさせていくことであるということになる。しかしまたキリスト教主義教育を標榜するキリスト教主義学校はまた、決して単なるキリスト教の伝道を意図するのではない。とすれば、キリスト教主義学校において、この救済論的現実の外に立つ児童や学生を相手に、このキリスト教主義教育を実践するということを、どのように考えるべきであろうか。

ここでブルンナーが、「神の像」を「形式的」と「実質的」とに区別したことに着目したい。たしかに「実質的」には、救済前の人間は、「実質的人格性」ともいうべき「応答責任性」を喪失してしまっている。その意味では、「人格への候補者」⁽⁷⁾（大木）という性格をもつと言われる。しかし人間は「形式的・構造的」には、依然として「人格性」を保持してもいる。それが人間を「木石」とせず、「犬猫」と区別する。この「形式的人格性」は、その実質においてはキリストにおいて実現するものであり、人間はまさしく『矛盾における人間』（ブルンナーの人間論の書名）として存在しているものであるにせよ、なお「形式性」という形で人間の人格性を確保するものとなっている。人間の人格性が「救済論」に集中してしまうのではなく、もう一つの立脚点、つまりそこに「創造論」的位置づけを与えることになる。人間を救済論的視点だけで見つめるのではなく、創造論的視点からも見ることは、そこで信仰の有無を越えた人間としての共通性を認め、普遍的基盤を有することになる。ブルンナーが、社会文化形成と人権問題に非常な関心を持ち、その実践に意を尽くしたのは、その理由からであった。それゆえブルンナーにおいて「救済」とは、「創造の回復」（「新しい創造」と対比して）なのであり、「実質を失った『形式的人格性』が、真に統一された完全

な『人格性』をとりもどすということが救済の意味」⁽⁸⁾となる。墮落しても救済への志向性を人間は喪失してはいない。その志向性の中での教育、つまり「実質的人格性」へと統一されていくことを志向していく教育こそ、キリスト教主義「人格教育」ということになるのではないか。

それは品性の涵養とか徳性の修練といった個別的、個人的な問題ではなく、「人格的關係・交わり」の中に生きる存在、「共に生きる」存在としての「人間性」の成長と、「統一された」人格としての成長を意とした教育であるということが出来る。そのためには社会を広く見ることが出来る広い視野と開かれた心が必要であり、深く広い教養が求められる。閉ざされた自閉的な在り方から脱却して、「隣人と共に生きる」生き方へと促していく教育として、また隣人に対する深い関心と理解を持ちつつ、隣人との交わりを形成していけるバランスの取れた健全なパーソナリティーへの志向性をもって教育が実践されていくことが「人格教育」として意図されるものだということが出来る。加山久夫氏（明治学院大学教授）はキリスト教主義教育の目ざすものが「クリスチャン・キャラクターの形成」にあるとして、「今までのキリスト教教育の中でとすれば、お坊ちゃんお嬢ちゃんの教育、高尚に言えばGentleman, Ladyの教育というような非常にお上品な人間を育てていくというものではなくて、もっと根本的に自らを問い直し、世界を問い直すようなキャラクターをもった人間を育てていくことができるかどうか。ですから人格というのはパーソンないしパーソナリティーという意味と共にキャラクターということですね。クリスチャン・キャラクターを育てていくということを真剣に考え直さなければならない」⁽⁹⁾と語る。かつてブルンナーは、創設間もない国際キリスト教大学の教授として来日、約2年に渡り教鞭をとるかたわら、各方面で精力的に講演をしたが、そこに彼の「教育宣教師」としての使命感と自覚をうかがい知ることが出来る。1954年

に青山学院大学で行われ、「キリスト教主義大学の本質と日本における使命」⁽¹⁰⁾と題された講演の中でブルンナーは、キリスト教主義大学の使命が「キリスト教人間観」の確立にあり、それこそが「学問と大学の自由の基礎をなす」と共に、それによって「自由な社会、および自由な教育の基礎」を築くことができることを力説する。そして「キリスト教主義大学は、自由な社会および教育を創造し、かつ維持するために、ならびに大学及び学問の自由のために、実に重要な使命をもっている」とするのである。この使命の基本にあるのが「キリスト教人間観」であり、「人間を動物の一種としてホモ・サピエンスと考えるのではなく、人間をフーマヌスとして考えるキリスト教人間観は、教育学にとっては特に必要なことである。キリスト教ヒューマニズムは、単なる功利主義、また単なる技術専門主義の中に自己を失わないために、人間の教育にとって必要な理想を与えることができる」と語る。ここには、神の像になぞらえて創造され、したがって自由と責任（応答性）を重んじるキリスト教の人間観こそが、「人格の自由、人間の尊厳、人権」を確立する土台であるとするブルンナーの確信がある。そうして「自由な民主的社会の基礎をつくるとともに、自由な人格的主義教育の基礎を築くために、ブルンナーは「教育宣教師」として来日したのであった。また「日本への希望」⁽¹¹⁾という講演では、汎神論的な日本とアジアの伝統には、「神にも人間にも人格性というものがない」と断じ、「民主主義の精神的基礎は……自由にして責任の主体たる人格というキリスト教的理念」であって、「これは『神の像に似せて創られた』というキリスト教的人間観の基礎の上に立って」いるとする。そして「責任の主体である人格の理念は……人間が『神の像に似せて創られた』ということ」であり、「創造主にして主なる神への信仰が『責任の主体である人間』の理念を生む」と語る。そこにキリスト教主義教育と学校の使命があるのである。それは真の人格的主体の形成とそれに基礎づけられた民主主義社会の確

立であった。

ここでの教育は、その究極においては、個々の学生が、真の「われ」として我々に対峙しつつ、我々を「汝」と呼び掛けて、ご自身との交わりへと招きつつ、我々を「人格的主体」として確立せしめる神ご自身との「出会い」へと促されることが目ざされる。しかしそれは教育的実践の現場においては、なによりこの神との「出会い」と「交わり」の中で生き、教育をする「教師」という「生き証人」との「出会い」と「交わり」において成立し、具現する。教師という人格の中で「響いている」神との人格的な交わりが、学生の人格へと「響き渡って」、そこで「共鳴、共響」していく中で、人格的「響育」が成立していく。学生のみならず、教師も圧倒的大多数が非キリスト者であるという現実においても、その非キリスト者教師自身の中で、またキリスト者教師との交わりと信頼関係の中で、同様の事態が生起していくことで、キリスト教「人格教育」は成立していくことができるのではないか。そこでは「共に生きる」ことに対する相互の真摯な努力と、誠実で真実な人間関係と交わりへの希求において、また一つの「共同体」として形成していこうとする願いにおいて、キリスト者と非キリスト者を問わず、教師と学生を問わず、一致していくことができ、そこにおいて人格教育は生起していくのではないだろうか。

註

1 節

- (1) ブルンナー、「教義学 I 神についての説教」(『ブルンナー著作集』第2巻、教文館、1997) p. 29.
- (2) 同、p. 34.
- (3) 同、p. 37.
- (4) 同、p. 39.
- (5) 同

- (6) 同, p. 39-40.
- (7) 同, p. 40.
- (8) 同, p. 41-42.
- (9) 同, p. 56-57.
- (10) 同, p. 57.
- (11) 同
- (12) 同, p. 58.
- (13) 同, p. 59.
- (14) 同, p. 76.
- (15) 同, p. 85.
- (16) 同, p. 85-86.
- (17) 同
- (18) 同, p. 101.

2 節

- (1) ブルンナー, 『聖書の真理の性格—出会いとしての真理』日本基督教青年会同盟, 1950, p. 45.
- (2) 同, p. 47.
- (3) 同, p. 48-49.

3 節

- (1) 大木秀夫, 『ブルンナー』(人と思想シリーズ)日本基督教団出版部, 1962 p. 114.
- (2) ブルンナー「哲学者の神観と信仰の創造神」(菅円吉訳『神と人間』1934) p. 50.
- (3) ブルンナー, 「教義学 I 神についての教説」(『ブルンナー著作集』第2巻, 教文館, 1997) p. 155.
- (4) 同, p. 157.
- (5) 同, p. 158.
- (6) 同, p. 159.
- (7) 同, p. 160-161.
- (8) 同, p. 162.
- (9) 同, p. 164.
- (10) 同, p. 179-180.

「人間の“人格”性の根源としての神

- (11) 同, p. 206.
- (12) 同, p. 206-207.
- (13) 同, p. 232.
- (14) 同, p. 235.
- (15) 同, p. 236.
- (16) 同, p. 238.
- (17) 同, p. 239-243.
- (18) 同, p. 244-245.
- (19) 同, p. 269.
- (20) 同, p. 274.
- (21) 同, p. 285-286.

4 節

- (1) 同, p. 375.
- (2) 同
- (3) 同, p. 382.
- (4) 同, p. 388.
- (5) 同, p. 390.
- (6) 大木, 前掲書, p. 132.
- (7) 同, p. 134.
- (8) 同, p. 141.
- (9) 加山久夫, 「問いとしてのキリスト教—キリスト教主義大学の明日を考える」『キリスト教主義教育』第24号, 1996, p. 16.
- (10) 中沢・川田編, 『日本におけるブルンナー—講演と思い出』, 新教出版社, 1974, p. 118-123.
- (11) 同, p. 151.